
苦厭 - クエン -

長野晃輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦厭・クエン・

【Nコード】

N1641U

【作者名】

長野晃輝

【あらすじ】

セカイを壊したい自分が歪んでいるのか、それとも壊したいと願われるセカイが歪んでいるのか。そんな苦しみの中、何もかもが厭になってもそれでも救いを求める主人公のお話。

20,000字オーバーの短編です。気長に読んでいただけると助かります。

ある日の夕刻。

その二人とぼくは出会った。

それは奇跡といってもいい僥倖だったかもしれないし、必然であるといえる通過点だったかもしれない。

ただ、その時のぼくにとっては前者としか思えなかった。

呼吸をするのも苦になるような絶望感が、胸を圧迫する。

それは過呼吸気味に強引に空気を肺に送り込まなければ、あるいは呼吸を止めてしまっていたかもしれないほどのものだった。

噴き出す汗を気にすることもなく、ぼくはただ荒い息を繰り返す。

秋の空気は澄んでいて、日が暮れた後にそれは鋭利な刃物のようだ。肺の壁を傷つけていくように冷たい。

ああ、違う。

そう思うのはぼくのせいだ。

その時のぼくはこの世界に生きていたくなかった。

何か、特別なことがあったわけではない。

ただいろんなものが煩わしく、また鬱陶しく思えたのだ。

学校も、家族も、友人も、他人も全部。

(……壊したくなる)

ぼくは本格的に参っていた。

きっかけみたいなのがあったわけではないと思う。

ただ、家族のどこか曖昧な距離感や、テレビの政治の醜態や、さまざまな事件や揉め事の報道、学生同士の喧嘩、クラスメイトの喧騒、日常のそれらが、

ただ、壊したくなっただけなのだ。
殴って、罵って、踏みにじってやりたい。
唾棄したい。

それはなんて楽しそうなことに思えた。
どうしてそれをしてはいけないのかわからなかった。

ぼくはただ絶望していた。

そんな思考が頭の中をぐるぐると回っていることに絶望していたんだ。

ぼくという人間の根底にはそんな考えがあったという事を、この輪廻は示していた。

それを認めたくなくて、感情を吐き出す場所すら確保することもできないまま、その日も過ぎていった。

そのころのぼくは家に帰ることもいやで、その上喧騒からも離れたために町のどこかへ繰り出すこともできなかった。だから、放課後は基本的に図書室で過ごしていた。

宿題などの勉強に、読書、睡眠とやることには事欠かなかった。

閉室時間の午後五時まで、今思うと自分の思考を止めるために、ぼくは一身に意識をそれらに向けていた。

その日は眠って過ごしていた。

長机に腕を組んで置き、それを枕にしてぼくは伏して眠っていた。
ふと目覚めたぼくは腕時計で時間を確認した。

(……五時、……過ぎてる)

デジタル表記の時計は既に五時十分を指していた。

いつもなら当番の図書委員がいつまでも居座るぼくを追い出すのだが、この日に限って見逃したのだろうか、ぼくはまだ、本と共に閉ざされた図書室にいた。

向こうのミスなら僕が気にする必要はない。そう開き直って、ぼくは寝なおそうと腕を腕を組み替えて机に伏す。

だができなかった。

一度覚醒してしまった意識は、なかなか眠りの淵へと向かってく
れなかった。

また、考えてしまう。

『本当にイヤダ。こんなセカイ。もう、イキテイタクナイ』

目を閉じて作り出した闇の中、黒い人型の輪郭がそう唇を動かし
た。

（そんなことはない、いつかこの世界をよく見える日が来るんじゃないか。そもそも君は何がたらくてそう思うんだ？）

ぼくはいつものように反論する。

だが影はぼくの反論や疑問を無視してぼくを一方的に責める。

『本当にそうオモッテイルノカ。セカイをよく見てみる。利己的な
人間のセカイ。そこにいて、オマエは何も思わないのか？

何かをコワシタイだろう？オマエのそれはこのセカイへの不満と、
それを打開したいと思う現れじゃないのか？

もし人が全て、タニンを想いやることができたなら。人と人が親切
心だけでタスケアエタナラ。

それは素晴らしいセカイだと考えてるんだよな』

人型が嗤う。ぼくの思考を読んでいるかのように、常のぼくの考
えをそいつは暴露する。

嘲笑う。その人型の闇は腹を抱えていた。

『ぼつかじゃねーの？』

……。

ぼくはいつの間にか沈黙していた。

『オマエ、社会じゃ少数派なんだよな。お前みたいに善人面引っさ
げて生きていけるほどニンゲン優しくないし、強くもないんじゃない
？ジブンのことでイッパイなんだからよ

それにさ、オマエ、そう思うだけで何かしたのか？』

闇の中で対峙するぼくは、左右の拳を爪が皮膚を突き破りかねな
いほどきつく握っていた。

ああ、たぶんその事実にはぼくは気づきたくなかったんだ。
そして人型は最後に提案する。
どこか慈愛を持ったその言葉。

『いい加減、ラクな生き方シテミタラ？』

ぼくはいつの間にか、歯ぎしりしていた。だけど、否定の言葉を叫ぶにはその感情は弱かった。だから、ぼくはその人型の口をふさぐことはできない。

『ジブンのことだけ考えてみろよ。低能なバカどもはヒト以下だ。オマエが気に留める必要なんざねーよ。』

ホラ、そうすりゃー悩みは万事解決だ。低能どもの心なんて考える必要もない。間違ったものは全部壊せばいいんだよ』

黒の人型は自分に酔ったように楽しそうにそんな演説を続けた。でもぼくにはそれに対してヤジも言う事が出来なかった。

否定できなかった。

『そういうのが賢い生き方なんだよ。なんでテメエはそうやって賢く生きれないんだよ』

(そんなの、ぼくだってわからない!)

ようやく紡ぎだせたそれは否定ではない。ただの嘆きの言葉だった。

ぼくは暗いなか目を凝らし、そいつを睨みつけた。

それは徐々に色を付け、ある形へと変貌した。

それは鏡を覗けば見えるものだった。セカイを恨んでいるように眼の下にクマを作り、恨みや憎しみのようなどろついた感情を湛えた瞳をした人だった。

その人型はぼくだった。

それはぼろぼろになった表情で、そのぼくの口で、掠れたぼくの声で告げる。

「オレはもうやめたいよ？こんなイキカタ」

壊れたぼくはそう言った。

2

その言葉を最後に、ぼくは消えた。代わりに現れたのは横に90度回転した図書室だった。

ひどく汗ばんだ体を起き上がらせ、背もたれにどっぷりとそれを預けた。

……。

ぼくは無心で呼吸を繰り返す。マラソンを走り終えたかのようにひどく肺が痛かった。

なにも考えられないまま、秋の空気はただ肺を痛めつけていく。

「……、……………!!……………だ……てよ」

耳に聞こえるのは、図書室の静寂とぼくの荒い呼吸音だけだったはずが、いつの間にか人の声らしきものが聞こえ始めた。

ぼくはそれに引き寄せられるように立ち上がり、無意識にその声の方へ歩きだしていた。

本棚に隠れた向こう側からその声はぼくを手招きしているようだった。

「……。し……ない」

本棚を回り込む前に、もう一つ、低い声が聞こえた。

その途端ぼくはなぜか声のほうへ向かうのを止めてしまった。

招かれているように感じた声が、その時はぼくを拒絶したように思えた。

本棚と本を背にして、膝を抱えるようにして座り込んだ。

浮かび上がるのはさっきのぼくの言葉。

賢く、楽に生きたいという告白。

それはぼくもまた同じで、ひどく共感してしまった。

世界に自分ひとりだけ取り残されてしまったような孤独と、どうしようもない空しさをぼくは感じていた。

その時ぼくは、
歌を聞いた。

低い声で、ゆったりとした旋律が奏でられる。
どこかで聞いたことがあるその曲は、

「坂本九」の『上を向いて歩こう』だった。

それは胸の奥の空白を温かいもので埋めるように、ぼくに染み渡ってきた。

ぼくはより強く、膝を抱いた。

「……うっ！ひっく」

孤独感と空しさと、温かい何かと体を抱いて、膝に顔を押しあて、ぼくは声を殺して泣いた。

どうして僕は泣いているのだろう。

間抜けなことにその時のぼくは全くわからなかった。

でも今はわかる気がする。

全てが嫌になっていた。絶望していた。でもぼくは壊れなくなかった。セカイを壊したくなかった。

でも世界が価値ある者には思えなかったのだ。

そんなぼくは優しくされたり、共感を得たり、そんな特別なことをしてもらいたかったんじゃないんだ。

ただ、キツカケが欲しかっただけだと思う。

ぼくが嘆くキツカケを、涙を流すキツカケを、世界について嘆くキツカケを。

その日までのぼくは探していたんだ。

そして、その歌はようやくたどり着いたキツカケになったんだ。

ひっくひっくとしやくりあげ、ぼくは何とか涙を抑えようとしていた。

でもできない。体裁を気にせず涙を流す。

堪えようのない羞恥心が心を埋めようとした。しかしそれ以上にぼくの心を占めたものがあった。

心地よさだった。

それは不覚にも本当に気分がよかった。

涙と一緒に、ぼくの抱えた何かも流れて行ってくれるようだったから。

だけどさすがに声を聞きとられたのか、パタパタと踵を踏んで履いた靴を鳴らしたような音を出し、誰かが近づいてきた。

「あり？人が残ってる」

女の子の声だった。

ぼくはいよいよ顔を上げられなくなっていた。ただ肩を震わして、泣き声を抑える。

そうしているとさっきの女の子の声に反応したのか、靴底をするような音が近づいてきた。

「マジか？あーあー、おれには何にもみえませーん」

どこかけだるそうなその声は低い男性の声だった。

「職務怠慢だね」

「いいえ、現実逃避です、っと」

語尾に何かを割り切るように付け足して低い声が言う。

よく聞くとそれはさっきの歌を奏でた声だった。

「とりあえず、あんた。落ち着くまでトイレにでも行って来れば？」

何か投げやりな調子に、女の子の声が「その態度はないよ！」と注意をして、バンっと何かを叩いた音がした。

「どうしたの？何があったの？」

子供にするように、女の子はぼくの肩をやさしく撫でてくれた。

ぼくは返事もできないまま、落ち着くまで、彼女の手の温度を感じていた。

暫くしてなんとか顔を上げられるようになり、そしてぼくは傍らのその少女の姿を目にした。

天使のような微笑みを浮かべたちょっと童顔の少女だった。

夕日に映えた栗毛が綺麗で、どこか浮世離れしている。ふわふわした雰囲気を持っている気がした。

「落ち着きましたか？」

ぼくはうんと無言で肯いた。

彼女はぼくを急かすこともなく、興味深いそうにぼくのあちこち見てくる。なんだか気恥ずかしい。

キョロキョロとぼくのあちこちを写す瞳や、子供っぽい顔なんかは無邪気な女の子という印象があるけれど、今もまだ触れているその手からは聖母のような優しさが感じられる。

あんまりじろじろ見るのも悪い気がするので、次にあの低い声の男性を探す。

だが、キョロキョロ辺りを見渡してもあの声の主らしい人はいなかった。

「もしかして、兄さん……を捜してるんですか？」

ぼくのそんな行動を猫のように丸い瞳で見つめていた彼女が尋ねた。

「……にいさん？」

彼女はぼくを腕を引っ張り本棚の向こうへ回り込ませた。

ゆっくり見え始めた棚の向こうにその彼はいた。

彼はどこにでもいそうなこれといった造形がいい顔でもない、特徴といえば黒縁のメガネと、人を遠ざけそうな鋭い目が表面上の特徴だった。身体的特徴は特になく、強いて言うなら机の下に見える足が長いような気がした。

彼は書類の束を机の脇に置き、それに一枚一枚目を通していうようだった。

彼は不意にすっと顔を上げ、ぼくの手を引く彼女からぼくへと順に視点を移し、またすぐに書類に目を移した。

「ネイ。そいつはもう大丈夫なのか？」

こちらを見ずにいう言う彼はどこか冷たい気がした。

「うん。そうみたい」

無邪気な笑みを浮かべ、ネイと呼ばれた少女はぼくの腕を引き、彼女が兄と呼んだ青年と同じ机、それもよりにもよって彼の正面の

椅子に座らせた。

彼はその眼光を真正面、つまりぼくに照射していて、ぼくは縮こまるように背を丸めてしまった。

なんでこうするんですか？

と念波を込めてネイさんの顔を見たが、何とも言えない微笑みを返して、ぼくの斜め前、彼女の兄から一つ間を開けた椅子に座った。彼女が座ったのを見てみると、いつの間にか彼は書類の方へ目を向けていた。

終始こつちを見ながら微笑むネイさんと、もうこつちを見ることもなく書類を整理するその少年は、鏡写しのように真逆だった。

表情も態度もそうだけど、雰囲気が全然違う。ネイさんは年相応の子供っぽさが残る柔らかな雰囲気だ。だけど、ぼくと年はほとんど変わらないと思われる彼は、大人の冷静さに似た冷たさが感じられる。

「さっそく質問だが」

やはり彼は書類を見たままそう口を開いた。

話し方もどこか冷たそうな気がしてきってしまう。

「あんた、閉館時間過ぎた後にどうして図書室にいるのか教えてくれないか？」

読み終えた書類をまとめて彼はようやくぼくの顔を見た。

ぼくの内心の全てを写したような、磨かれた鏡のような彼の瞳を向けられると嘘なんて見抜かれてしまいそうでつけない。

「ぼくはさっきまで寝てたんです。いつもは図書委員の人に起こされるんだけど、今日に限ってそれがなかったみたいです」

正直にそう答えた。

だけど何故か彼は一瞬不機嫌そうに眉をピクツと動かした。

何か悪いことを言ったのだろうか、ネイ(?)さんの様子を窺うと、両肩を竦めて苦笑いを送ってきた。一体どういうメッセージなのか、思考しているとふと彼女はニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「兄さん、完全に職務怠慢決定だね。いつも閉館までいる男の子がいるから、その人に声をかけるよう当番の人に言われてたじゃない」
あからさまに自分の兄を非難するネイさんは心の底から楽しそうだった。

「……」

そのお兄さんは頭を掻きながら、無言でそれを聞き流しているように見えた。でも、その姿になんだか諦めと呆れが見て取れるような気がした。

じろつと彼の双眸がぼくを貫いた。蛇に睨まれた蛙のようにぼくは緊張で動けなくなってしまった。

「おい君」

彼は椅子の上で背筋を伸ばし、正しく四十五度頭を下げた。

「すまなかった。こちらのミスを君のせいにするところだった。許してほしい」

パチリと一度瞬きしてから、ようやくぼくは謝られていることに気がついた。

「あ、いえ。そのぼくもうっかりしていましたし」

うっかりも何も寝ていたら時間が過ぎていたので、ある意味では不可抗力かもしれない。しかし、ぼくもそれを確認したうえでさらに眠ろうとした。間違いなくぼくにも責任はある。

「本当にすまない」

もう一度謝罪の言葉を口に出し、彼はようやく頭を上げた。

「兄さんが謝るなんて珍しい」

ニヤニヤとネイさんは笑い、お兄さんはそっぽを向いた。

「俺が謝るのが珍しい訳じゃない。俺が謝る事態に陥るのが珍しいんだ」

なんか子供の屁理屈のようだった。はいはいとそれをあっさり流すネイさんとのやり取りは傍で見ていると微笑ましい。

このやり取りだけで随分とネイさんのお兄さんの印象が変わった。
「あもう」

その空気に割って入るのはかなり難しいのだけど、この際仕方ない。

「お二人は図書委員なんですか？ 自慢じゃないですけど、ぼくこの常連なんで、図書委員の方の顔はほとんど覚えてるんだけど、二人ともお会いするのは初めてですよね？」

それは好奇心からの質問だった。もちろん二人が初対面だったこともあるけど、何より閉館時間を過ぎた図書室でどうして歌を歌ったのか気になった。

二人の計四つの眼がぼくを射抜く。

お兄さんは怪訝そうな、ネイさんは驚いた様子もなく平然とした様子だった。

「……意外と俺の顔は知れてないのか？」

ほとんど表情を変えないまま首を捻るお兄さんはどこか不満そうだ。

「世間の認知なんてそんなものだよ♪」

表情がコロコロ変わるネイさんは機嫌良さそうに笑っていた。

なんだか楽しそうな彼女を見てみると、こっちまでちょっと楽しなくなってくる。不思議な娘だなあ。

「無知な君に教えておいてあげよう。自分のことを何も言わないのに他人になんでも聞くのは少し印象が良くないものだよ。こっちも君と同じで、顔を向き合わせている男の名前を知らないんだからな」
皮肉っぽく彼はぼくを睨むが、もうそんなに怖くない。

彼の話からすると、ぼくが先に名前を教えた方が良かったということなのか。

遅れたけれどぼくは頭を下げた。

「ぼくは陣野じんのです」

「陣野か。」

俺は森田もりたひろや。森田宏哉。図書委員のヘッド。図書委員長なんて役職の男だよ」

図書委員長と聞いて、想像したのはほとんど形式だけの生徒会の

各役職を決める選挙。大抵は信任投票で、むしろ立候補してくれる人を探すのが課題であるだろう。

図書委員長も立派な図書委員の一人だ。だけど、会う機会もない上に、信任投票だけで決まって、それ以来表に出ていない各委員長の顔を覚えていいるはずもなかった。

「それでこいつが妹の……」

手に向けてネイさんを示す。

「森田音衣です。音の衣と書いて音衣って読むの」

音の衣。それは一体どんな想いでつけられた名前なのか。

「陣野君はどんな名前なの？」

「……どくなって言われても」

「下の名前は？」

「隆^{たかし}司です。法隆寺の隆と司とかいて隆司」

「……兄さん、法隆寺の隆ってどんな字でしたか？」

音衣さんは何やら小声で宏哉さんに質問していた。

スツと彼は小さな紙を彼女に指し示した。

「なるほど。いい名前だね！で、どういう意味があるのかな？」

あまりに澄んだ瞳で尋ねられ、思わずぼくは正直に説明していた。一般的ではない自己紹介だと今でも思う。

3

そこからぼくらは少し話をした。

基本的には音衣さんが話して、ぼくが受け答えして、宏哉さんは書類を整理しながら、偶に音衣さんに話を振られると顔を上げてぼくらに交わった。

「どうして閉館時間を過ぎてるのに二人はここに残ってるの？」

音衣とぼくが同い年だったこともあるけど、フレンドリーな彼女の態度がぼくの口を軽くしていた。

いつの間にか敬語を止めていたぼくを気にした素振りもなく、音

衣は笑う。

「閉館時間は過ぎたけど、完全下校まではまだ時間があるからだよ」
ぼくが首を傾げた。確かに完全下校は六時ぐらいだったけど、それがどうしたんだろう？

「図書委員会の仕事が残ってるんだよ。俺がやってるこれだ」
すかさず宏哉さんがもう十枚もないだろう書類を指で叩く。

「要望書ってやつかな。この本が読みたいから図書室に置いてくれとか、新しく出る本にこんなのがあるから置いてくれってやつ。それを纏めてるんだよ」

彼はボールペンとA4サイズのノートを示す。

そのボールペンを右手で回しながら、彼は疲れたように笑う。

「この纏めたやつをプリントにして、委員会と図書室の先生に提案するんだよ。それで次の委員会でみんなで議論するわけだ」

「あれ？要望書をそのまま委員会で議論するんじゃないんですか？」

「いやいや。しょーじきそんなふうにできないんだよ」

彼は山のような要望書をボールペンで示す。

「内容が重複してるものもあるし、中には議論に値しない要望書もある。議論する以上ある程度分かり易いデータとして纏めた方がスムーズに進むしな」

誰も図書委員会で学校に残り続けたいとは思ってないだろう？と彼は笑って言う。

けどぼくは少し首を捻った。

「図書委員って本好きだと思ってたけど」

「そりゃ立候補でなったやつはな。でもそれだけじゃないだろう？くじで運悪く図書委員になったやつもいるし。それに本好きは本が好きなだけで、学校の図書室が好きとは限らないだろう」

それもそうかとぼくは納得した。

「とにかく面倒だけど、みんなのために俺もこうして頑張ってるんだよ」

どこか誇らしげに彼は言った。

「みんなのため、ですか？」

ぼくは知らずそう漏らしていた。

ぼくの中に暗い感情が湧き出していた。

ぼくにはそんなことはできないだろう。ぼくは彼の言う《みんなを壊したいのだから》。

焦燥感に似たこの感情はなんと呼ぶものなのだろう。

さっきまでの楽しい会話を忘れたようにぼくはその感情にのまれていた。

「そうだよ？」

おこがましくあるかもしれないが、俺のこれは間違いなく人のためにやってるよ。

ただ内申点のために委員長やってるなら、ここまではやりたくないからな」

彼はぼくの瞳から目を逸らさずに、ただ何かを見通すようにずっと見ていた。

逆にぼくはそれから逃げるように目を伏せた。

彼の鏡のような輝きは、ぼくには眩し過ぎたんだ。

彼はきつと素直に人のために行動できるのだろう。

打算も裏も何もなく、彼はただ努力してのためになることをしている。

文句も言わずに、むしろ誇らしく。

そんな彼の努力の賜物かもしれない。図書室こくしつがぼくにとっても居心地の良い空間になっているのは。

口に出すこともできないぼくとは、大違いだ。

ああそうか。

ぼくを支配したあの焦燥感に似た感情の正体がわかった。

あれは嫉妬だった。

ぼくは彼のように行動したかったんだ。

苦しかろうと、面倒だろうと、人のために行動したかったんだ。それがきつと、ぼくが望んだセカイを作る方法なのだから。

そんなぼくをどう見たのか、彼はふっと空気が抜けたように笑った。

「ま、君にもいろいろあるだろうけど、聞かないよ」

その方がいいだろう。

聞かれたところでぼくにも説明できない。

ぼくを悩ましていたあの衝動。それはぼくの本質に近いものだった。

すべてが煩わしいだとか、人の喧騒が鬱陶しいだとか、利己的な人間が厭だとかそんなものは二の次の理由だった。

ぼくの本質が第一に、そんな世界の破壊を望んでいるのだ。

こんな不満だらけのセカイを壊したい。そうして人のためにみんなが行動できるセカイが欲しい。それがきつとぼくの心からの願望だったのだ。

でもぼくは、そのための行動すらしていない。

もちろん壊してはいけないのだけど、彼のようにそれができる人を見ると、その自分の矮小さや醜さが際立ってしまう。

月と並べられたスッポン。そんな言葉が今になって浮かぶ。

そんなぼくの暗い面を人にわかるように説明できないし、したくない。それはその時も同じだった。

それっきり彼は完全下校を知らせるチャイムが鳴るまで何も話さなかった。

余計なことは話さないとその態度は雄弁に語っている気がした。

逆に音衣さんはとてもお喋りだった。

ぼくが黙り込もうが、お兄さんが黙り込もうがお構いなしだった。むしろお兄さんが沈黙を決めたのをいいことに、その口は制限が外されたように動いた。

「陣野君。クラスは何組？誕生日はいつ？血液型は？好きな食べ物？嫌いな食べ物？」

私は6組で、誕生日は12月30日！血液型はO！好きな食べ物

はレモンタルト！でも、甘いものなら大体は好きだよ！嫌いな食べ物には辛いもの！カレーは甘口にはちみつと卵を混ぜたものなら大好き！」

と、ぼくがいちいち答える間もなく次々と質問を連射してくるマシガントークだった。

でも彼女はぼくの話聞いていないわけではなかった。

自分のことを話した後はきちんとぼくの目を見て、話すのを待っていてくれた。

どこか子犬を思わせる瞳でぼくはいい子なんだなと思う。思わず微笑んでしまうぐらい。

そんな彼女を悪くは思えなかった。

でもこの娘とぼくが煩わしく思った喧騒と何が違うんだろうと、ふと考え込んでしまった。

どちらも騒がしいはずで、もしそれが会話だったとしても、ぼくは嫌になるはずだ。

本当にどうなってるんだろうと夢中で話す彼女をぼんやりと見つめていた。

その時、チャイムが鳴った。完全下校を知らせるチャイムだった。ガタツと椅子を鳴らし、まず初めに宏哉さんが立ち上がった。

「音衣、先に校門まで出といってくれ。俺はこの鍵を職員室に戻してから行く」

彼はそう言い残して図書室の本の貸し出しの受付カウンターの方向へ行く。

音衣さんはのほほんとした様子で手を振ってそれを見送った。

「じゃ、邪魔にならないうちに行こうよ」

確かにいつまでもお世話になっているわけにはいかない。

彼らのおかげでほんの少しだけ楽になったし、お兄さんの言葉には道を開いてもらった。

きっと彼らに関わるのもこれで最後だ。

ぼくはホッとしたような、どこか物悲しいような気分で図書室を

出た。

「ぼくはもう帰るよ」

靴箱へとスキップしてるかのように軽い足取りで向かう少女の背に声を掛けた。

振り返った彼女は思わず吹き出しそうになるくらい間抜けな顔をしていた。

「へ？一緒帰ろうよ」

「一緒って……」

家の方角だってまだ知らないのに、なんでこの娘は一緒に帰るつもりでいたんだろう？

「兄さんもそのつもりだと思うよ」

「そういう問題じゃないし、お兄さんがそんなこと言うとは思えないんだけど」

ほとんど無意識にそう返すと、音衣さんはぷくーっと頬を膨らませた。

「そういう問題なの！なぜならわたしが隆司君と一緒に帰るつもりだから！兄さんもお菓子のおまけのように付いてくるの！」

拗ねたように、あるいは怒ったように彼女はぼくの腕を取った。

「え、ちょっと！」

「いいから、早く来るの！！」

またしても掴まれた腕を引かれ、僕らは夕空の下へ向かう。秋の夕日はどこか優しく、その身を赤く燃やしていた。

多分、このとき彼女はぼくを放って置けなかったんだろうな。

ぼくがどんな顔をしていたのかはわからないけど、彼女たちが心配になるような顔をしていたのは間違いないだろう。

音衣さんはそんな人を見て見ぬふりはできない。

そういう人なんだ。

校門で合流したお兄さんは、ぼくの腕を捕まえた音衣さんを見て

ただ肩を竦めた。

ただ、何も言うことはなくさっさと歩き始めた。
一歩後ろを僕の腕を引く音衣さんが同じペースで歩く。

「隆司君のうちはどこ？」

ホントに来る気なのか？と背に汗を流しながら、一応自宅のある町名の名前を言ってみた。

「距離的にわたしたちの方が近いね！」

バン！！とお兄さんの背を音衣さんは叩いた。

「痛いんだが？」

「気にしない気にしない！」

またしても肩を竦め、いそいそと歩き始めるお兄さんはどこか哀愁すら感じられた。

ふと音衣さんを見ると、実の兄を叩いたにもかかわらず、「服は何しようかな」と悩ましそうに顎に手をやって考えていた。

だんだん足並みが遅くなり、ついにはぼくよりも後ろを浮かれた思案顔で彼女は歩いていった。

それを苦笑いで見守っていると、宏哉さんが少し申し訳なさそうに目を細めながら近づいてきた。

「悪いな。どうやらあいつ、一度家に寄ってから君の家にお邪魔する気みたいだ」

もはや彼女にとってそれは規定事項なのだろうか。と呆れを超えた笑みを浮かべてしまう。

ともあれ、少なくとも広哉さんはそうなることを気にしているようだ。

「ぼくは別に構わないですよ。二人の家に行くのも、二人が家に来るのも」

「……俺も行くのか？」

というか妹さんが行くだろうって予言してました。

「まあ、君はいいだろうが、親御さんとかの事情もあるだろう？」
ぼくは少し暗い気持ちになる。

親は最近ぼくとの距離感を測り損ねている。これが思春期と彼らは納得しているようで、ぼくの様子にを特に不審がってはいない。何にせよ彼らとぼくの関係は良好とは言い難い。

だけど感謝はしていたし、今もしている。この時のぼくに必要以上に関わられたなら、ぼくは彼らと出会う前に壊れていただろう。気づくとお兄さんはぼくを凝視していた。一体ぼくがどんな表情をしていたかはわからないが、いい感情は浮かんでいなかったということだろう。

「大丈夫ですよ」

ぼくは少し慌ててそう答えたが、彼はまだしばらく何かを見通すようにぼくを見つめていた。

今度はぼくもそれを見返す。視線が揺らがないように意識を集中させた。

やがて、ぼくが気まずくなる前に彼はその双眸をぼくから外した。内心ほっとする。彼に見つめられると小さなウソでも見抜かれそう。うだ。何より、人に暴かれたくないこの暗い部分をすぐに見透かされそうで怖かったのだ。

「おい！音衣！そんなフラついた上に遅く歩いてんなら置いて行くぞ」

「はっ！！ちょ、ちょっと待ってよ」

あたふたした音衣さんが駆け足で戻ってくる。

ぼくはその瞬間まで、お兄さんから微妙な距離を取っていた。

無意識の警戒が現れてしまったかのように、ほんの数歩分の距離を。

4

学校から五分ほど歩いた閑静な住宅街に兄妹の自宅があった。良くも悪くも普通の二階建ての住宅だ。表札は森田とだけあり、ガレージには白いワゴンが置いてあり、その脇には赤と黒の車体の

自転車がある。

これ以外に特に目立った箇所もない。本当によくある家だ。もちろん二人にとっては唯一の家なのだけど。

もうやめようとぼくは首を振った。

こんな考えはダメだ。宏哉さんたちに悪い。

「たっだいまゝ！」

弾むような音衣さんの掛け声とともに彼女は帰宅した。

それを外から見ていたぼくと宏哉さんは一瞬顔を見合わせた。

「……上がるか？」

彼は自宅を指して言った。

「いえ、待ちますよ」

ぼくは首を横に振り断った。

「だけどな、あいつこうなると時間かかるぞ？」

「……」

「それも三十分ぐらいは」

さすがに馴染みのない家の前でずっと立っているのはご近所的な意味合いで都合が悪い。

「……お邪魔します」

「そうするといい」

ぼくは宏哉さんに着いていった。

森田家はひどく対照的な家だった。

というのも玄関の左半分、靴箱はとてもシンプルなのだ。

最小限の傘やスリッパだけを置いてあり、見なかったけど、靴箱の中も多分整理整頓されているのだろう。

対する右側。小さな棚の上に家族写真と日本生まれのリボンがキユートなネコ(?)のぬいぐるみがいくつも置いてあった。

「そっちは音衣の趣味だ」

宏哉さんはなんだか呆れたように笑った。

「あいつの部屋もそれで一杯だよ」

なんとなく想像してみるとすごく似合う光景だった。絶対抱き枕

代わりの大きなやつが一匹いるんだろうなと思った。まあ、実際にそうだったのだけど。

「この写真は？」

おそらく最近の写真だろう家族写真の隣に、二人の両親だろうか、儂げな雰囲気を纏った女性と、その人の方に腕を回す壮年の男性が写った写真が写真立に飾られていた。

「うちの親の若いころの写真だよ」

家族写真の二人と比べると確かに随分若い。

「無駄に仲がいいからな。うちの両親」

無駄につて、とぼくは苦笑いで返した。

他になんというべきかわからなかった。

「家族写真を玄関に飾るっていうのは珍しくないですか？」

「そうなのか？よくわからないけど、母親がしてるんだ」

彼はそこで何かを思い出すように宙に視線を迷わせた。

「ああ、そうだ。なんか浮気防止にいいって言ってたか」

またしてもコメントしづらいことだった。

「まあ、上がってくれ」

ぼくはちよつとだけ名残惜しくてもう一度写真を見た。仲良さそうに父親に甘える音衣さんと嬉しそうに微笑む父親。そして、それを両脇から温かく見つめる宏哉さんと母親。

それは、他人のぼくからすればとても幸せそうな家族の写真だった。

「茶でも飲むか？」

リビングに案内した宏哉さんは席を勧めるよりも先にそれを尋ねた。

「いいえ。遠慮しておきます」

彼はそつかと興味なさそうに返事をしてから、ソファアをぼくに勧めた。

「どうも」

ぼくは一礼してからソファ―に腰掛けた。

彼は少し離れた椅子に座った。

今日会ったばかりの人の家にいるという極めて稀なシュチュエーションのためか、ぼくはなかなか落ち着かなかった。汗が滲みだして、喉が渴いてきた。お茶をもらっておけばよかったかもしれないと少し後悔した。

「……くっくっ」

突然笑い声が聞こえた。

驚いて声の方を向くと、宏哉さんが口を押えて笑いを堪えていた。「わ、悪い。なんか笑えてな。ははっ。あのバカ、すぐに帰ることになるだろうに、今頃飛び跳ねながら服を選んでんだろうなって思うとさ……ククク」

今はもう六時だ。このままいくとぼくのうちにたどり着くのは多分七時を過ぎたころだろう。その時にはもううちの母親も食事を作り終えているだろう。

そうになると、もし音衣さんだけならご相伴に預かるかも知れないが、多分宏哉さんが窘めるだろう。

しかしそれを笑う宏哉さんはなかなか趣味が悪いと思ってしまった。

そういえば、この人たちの両親はどうしたのだろう。どこかに出かけているのだろうか。

「お二人の御両親はどこかへ出かけているんですか？」

思ったことをすぐに口に出してしまった。そう後悔した時はほぼ間違いなく既に遅い。

「二人ともそれぞれ単身赴任中だよ」

それにあっさりと返答した宏哉さんも驚きだが、その内容にへっ？と間拔けな声を上げてしまうほど驚いた。

「父親は、……まあ何やってるのか話してくれないからわからないが、ロンドンにいるらしい。母親はインテリアコーディネーターやっつて、今も世界のどっかで仕事してるんじゃないかな？」

何気にすごいことを聞いた気がする。

「じゃ、家事はどうしてるんですか？」

「俺と音衣で、交代にしてる」

「すごいですね」

「すごくないよ。必要があれば誰だってできるようになる」

ほへっつとぼくは感心した。同年代でこんな人は滅多にいないに違いない。

すごいなとぼくは本当に素直に思った。

それと同時に改めてぼくの矮小さを思い知らされた気がした。

宏哉さんは図書委員長を務めていて、しかもきつといい人だ。わざわざ放課後残って図書委員会のために一人たぐさんの資料を整理していた。それも自分のためじゃない。人のため。

音衣さんはよくわからないけど、きつとたぐさんの人の支えになっているんじゃないだろうか。ぼくも少し前に支えられたのだから。それに比べ、ぼくは？

ぼくはいったい何をしたんだろうか？

ぼくは何もしていない。行動も、声を上げることも。

ぼくはただ世界が嫌だと嘆いてばかりだ。

そんな風に行動できるのはなぜだろう。ぼくはそれがとても気になった。

「あの、……訊いてもいいですか？」

唐突にぼくは尋ねた。

彼は少しだけ目を丸めたが、

「ああいいよ。答えるかどうかは保証しかねるけど」

そう言って宏哉さんはいたずらっぽく笑った。

しかし、一体何を訊けばいいのだろう。ぼくはしばらく悩んでからゆっくりと尋ねた。

「その、どうして図書委員長になったんですか？」

「頼まれたからだよ」

「えっ？」

素っ頓狂な声を出してぼくは驚いた。

「去年の夏ぐらいかな、その時の担任に『図書委員長になってくれませんか?』って必死に頼まれたから、すぐその場で承諾した。で、そのまま俺も例にもれず信任投票だったから当選。現在に至るわけだ」

彼は結構詳細に説明してくれたけど、ぼくは一つのことだけが気になった。

「な、なんで頼まれたからって。それだけですか?」

彼は二、三度瞬きを繰り返した。

「そうけど?」

今更ながらぼくは戦慄を覚えていた。

目の前の人は普通の人とどこかズレている。

普通そんな状況になれば人は迷うし悩む。でもそれをこの人はその場でって言った。彼の様子からするにおそらく二つ返事だったのだろう。

「だって、普通面倒とか、自由な時間が減るとか思うでしょう?」

「ああ、それは思った。当選した後になんか」

ぼくは思わず「ぼっ」と訳のわからない声を上げて、まるで未確認生物でも見るように彼を凝視した。

「なんで、そんなことができるんですか」

ぼくの声は震えていたのだろうか。ひどく言葉が詰まりそうだった。

「なんでって、本当に担任が困ってたからな。多分断られまくった後だったんだろうな。顔真っ青だったし」

「それだけで?」

「それだけだが?」

本当に何も特別なことではないように彼は澄んだ目をぼくに向ける。

最初に見た時とは別の理由で、彼の瞳から目を逸らした。とてもじゃないが信じられない。

まるで彼は、自分のことなど考えないかのように思えてしまったのだ。

そんな風に生きていたのだろうか。彼は。

少し前は嫉妬だった感情は恐怖に変化し始めていた。人のために行動する彼の羨ましく思ったが、違う。そんな生き方をすれば疲れる。

人のためになることをすればいいと考えていたぼくは今壊れかけいる。

でも、彼は実際に人のために行動していた。

そんなの、ぼくがすれば疲れてすぐに壊れてしまうだろう。

でも、きっと彼はそうして生きてきたのだろう。

「……とても真似できないや」

小声でぼくは呟いていた。

もしかしたら憧れだった行動をする人に出会えたのに、その模倣すらできない。それはぼくに十分に絶望を与える事実だった。

「どうして君が真似る必要があるんだよ？」

小声のつもりだったがどうやら聞こえてしまったらしい。

ぼくは顔を伏せた。ともすればまた泣いてしまいうさだった。

「どうして、そんなつらい生き方をしているんですか？」

夢の中の壊れたぼくが似たようなことを言ったような気がする。

「もっと楽な生き方があるんじゃないですか」

奇妙な笑みが能面のようにぼくの顔に張り付いていた。

それを、なんというのかその後の宏哉さんが教えてくれた。

その笑みは『狂笑』だと彼は言った。

ぼくが壊れる一歩手前の表情だ。

「だろうな」

狂い掛けたぼくの問いかけに宏哉さんはいたって冷静に答えていた。

「自分のことだけ考えた方が楽だし、手っ取り早いだろうな。俺を見てそいつらは笑うのかな」

彼はむしろ清々しい笑みを浮かべていた。

張り付いた笑みの奥でぼくはまたしても戦慄していた。

「でも残念。俺は笑う側には回れないんだよ」

周回遅れのランナーを励ますように、彼はどこか温かく微笑んだ。
「だってさ。これが俺だから。そういう風になってるから」

本質は否定できない。そう彼は笑って言った。

「それにさ、俺が幸せって、誰が決めたんだよ？」

「！！」

何よりも、その言葉が胸を打った。

『ラクな生き方シテミタラ？』

そう影のぼくは嘲笑した。

ぼくはそれに否定の言葉を見つけられなかった。

でも、彼は既にそれを見つけていたんだ。

おそれに変わった感情が、また憧れに変わった。

彼のように、いや、彼と同じ考えを持って生きたい。

「ありがとうございます」

立ち上がったぼくはいろんな意味を込めてそう言い一礼した。

顔を上げると何もかもを理解したかのように、宏哉さんは黙って頷いていた。

きっと宏哉さんは自分の生き方と、心の在り方を受け入れたのだろう。

だからこそ、彼は清々しく笑えたんだろう。

彼のおかげでぼくは自分の生き方を肯定できた。

でも、まだこのぼくはそう笑えない。

ぼくはまだ、セカイの破壊を望む心の在り方を受け入れられなかったのだから。

宏哉さんは夕食の下ごしらえを終えて早十分。

ようやく音衣さんが降りてきた。既にもう日もどっぷり暮れていた。

「お待ちせーッ！」

「待たせ過ぎ、……」

「あ……」

音衣さんを見てぼくら男どもは呆気にとられてしまった。

何と音衣さんの格好はこの家に入る前と同じ、つまり制服のままだったのだ。

しかし、ちょっとオシャレはしている。爪には薄くラメ入りのネイルが塗られていたし（もしかしたら付け爪かもしれないけどぼくにはそれは見極められない）、髪はちょっとフリフリのついたバンドで括られていた。

「音衣。なんで制服なんだよお前は!!」

ちよつと沸点をオーバーしたのか宏哉さんは声を荒げた。

「だって、隆司君の家に行くのも初めてでしょ？ だったらまずはお友達ですってアピールしておかないと。だから制服で行くの」

頭いーでしょと彼女はちよつと胸を張った。そうして兄の方に歩み寄り少し、頭を傾けた。

「えへーっ。なでなでして」

ぶほっっ!!? とぼくはむせ返ってしまった。

なんだその破壊力抜群の甘え声。

不満そうに眉を顰めた宏哉さんは妹が望んだとおりその頭を優しく撫でる。

しかし不意に彼の目が血走ったかと思うと撫でていた手が音衣の頭を鷲掴みした。

「このバカ妹ーっ!!」

「痛いっ! 兄さんっ!! なんて、なでなでからのアイアンクロー!」

がやがやと騒ぐ兄妹。大変仲がよろしいようで結構なことだと他人事で思った。

ちなみになでなでからのアイアンクローは森田家男子の一子相伝の技らしい。

心底どうでもいいと、音衣さんから聞いたぼくは思った。

数十分後。

本当に家にまで着いて来た音衣さんたちだった。

こっそり帰ろうと思ったぼくのもくろみも淡く崩れ、帰宅した父親を迎える母親、つまり両親とすっかりばったり遭遇してしまった。ところが意外なことに両親はむしろ森田兄妹の突然の訪問を快く受け入れ、遠慮というより既に用意している夕食の処理法故に断る宏哉さんを強引に押し切り、うちで夕食を取らせた。

なんだか気まずい思いをしながらも食事を終えたころにはもう九時になろうかとしていた。母親の「送ってあげなさい」という助け舟のおかげで、両親からの質問攻めという拷問は延期された。

ぼくは暗い街を音衣さんの隣を歩いて進んだ。宏哉さんはぼくらのすぐ後ろに着いていた。

「いやゝ、すっかりごちそうになっちゃったね」

振り向いて宏哉さんに話を振る音衣さん。

「あれだけ断ったというのに、強引な御両親だな」

「はははっ。ぼくもあんな人たちだとは知りませんでした」

乾いた笑い声と共に冷や汗が流れた。本当に知らなかったんですよ宏哉さん。だからそんな恨めしそうな目で睨まないでください。コワイですから本当に。

持ち前の鋭い瞳の視線がちくちくとぼくの背を刺す。

そのまましばらく進んでいき公園に差し掛かったころ、音衣さんが変な声を出し始めた。

「あゝあゝあゝ」

発声練習前に声の調子確かめるかのように「あゝあゝあゝ」と

繰り返す音衣さんに、宏哉さんは掌に拳を下した。ガッテン？。

「すまん。俺は用事があるから、陣野は音衣を送ってやってくれ。あ、音衣、これ鍵な」

すごい棒読みでそう言っつて、彼は止める間もなく宵闇の向こうに消えた。

「え？何今の？」

「なんでしょーねー。兄さんはたまに意味不明な行動をするから、気にしないでね」

さっきの「あゝあゝあゝ」も、大分意味不明な行動だった気がするのだけど、これも気にしない方がいいのだろうか。いいのだろうか、精神衛生上。

「ちよっとおながが一杯で疲れちゃった。ちよっと公園で一休みしない？」

と言いながらぼくの手を掴んで連行する音衣さん。なるほどつまりぼく的意思是関係ナッシングってことだね。

無理やりというか強引というか、とにかくぼくらは夜の公園のベンチまで行った。

人ひとり分のスペースを開けて音衣さんとぼくは隣に座った。

「えーっと、おなか大丈夫？」

とりあえず名目上のおなかのことを訊いてみた。

「しばらくすれば大丈夫。それよりも」

彼女は急に空いていた距離を詰めてぼくの瞳を覗き込む。

「隆司君は大丈夫なの？」

黒々とした彼女の瞳にはブラックホール並みの引力が秘められていた。

ぼくもまた、その引力に引き込まれる。

「な、何が？」

かろうじてそう返答することができた。彼女は目をぱちぱちさせた。

「さっき、図書室で、泣いてたよ」

「……」

大丈夫、とは言い切れなかった。

兄と同じように彼女のブラックホールもまた、嘘だけを取り除き、真実を詳らかにする不思議な力を持っているようだったのだ。

ぼくはそう。大丈夫ではなかった。ぼくはまだ、セカイの破壊を望むこの心を受け入れられないでいたのだ。だから、大丈夫とは言えない。まだぼくは、己の黒い輪廻から抜け出せない。

「あのね。人を癒せるのは人だけじゃないんだけど、人を温められるのは人だけなんだって」

彼女はぼくの胸に、心臓の上に掌をそっと置いた。

彼女の掌は、やっぱり温かった。

その熱が心臓を通してぼくの血潮を温めていく。

刃のように冷たかった空気もまた、嘘のように温かく感じられた。

「ねえ、話してくれないかな？ 隆司君。君はどうして泣いてたの？」

それは宏哉さんの歌のおかげだった。

でもそれが彼女の聞きたいことではないのだろう。

ぼくの本質。ぼくという人間の心の在り様がぼくの苦しみの種だった。

「……ぼくはね。ぼくは、セカイが嫌いなんだ」

「……」

ぼくの心臓の真上にに掌を押し当てたまま、彼女は固まってしまった。

「人が嫌いだ。社会が嫌いだ。自然が嫌いだ。生きているのが嫌いだ。」

学校が嫌いだ。クラスメイトが嫌いだ。親も嫌いだ」
厭な気分だった。自分の抱えていた暗闇がこんなに黒いものだとは知らなかったのだ。

「そして何より、全てを嫌うぼく自身が嫌いなんだ」

音衣さんはとても苦しそうに目を閉じた。一体何が苦しいのだろう。

と共に、不意に頬に感じた夜風が妙に痛かった。
どうなっているのだろうとぼくは頬に手を添えた。
ヌルっとした感触がしたそれはぼくの涙だった。

「でもね。ぼくは知ってるんだよ。人は大切だ。社会は大切だ。自然は美しく、生きているのは素晴らしい。

学校は楽しい。クラスメイトは大切だ。親にも感謝しているんだよ」

そんな二律背反を抱えてぼくは生きていた。でもそれはとても疲れることだった。

だからこそ僕はセカイが、嫌いだった。

たとえば人が大切だと言っているのに、人が傷つくこのセカイが憎くなった。

たとえば社会のためのことが、実は一部の人間のための行動になることがあるのに耐えられなかった。

たとえば自然保護を叫ぶ一方で、自然破壊が進むことが許せなかった。

そんな、

些細なことから大規模なことまで、ぼくはいろんなことが厭だったのだ。

心から。

歪んだセカイ。そんなものなら、壊してしまえ。

それとも、そう思うぼくが歪んでいるのだろうか。

ひたひたとぼくのきつく握りしめた手の甲に水滴が落ちた。

音衣さんは、その手の上に自分のもう一方の手を重ねる。

「きっとみんなそう思ってるんだよ。でもね隆司君みたいに深刻にならないんだよ。貴方は、きつとすごく優しい人で、いろんなことや、いろんな人を考えを理解できるんだと思う。だから、それぞれの違いがあなたにとって、すごくすごく苦しんじゃないかな」

彼女はぼくを定義していく。

「……わからないよ。……わからないんだ」

「うん。そうだね。私にも実はよくわかんないんだ。えへへ。ごめんね」

ぼくらは暗闇で励まし会う迷子の姉弟のようだった。

「きつと隆司君って人を、隆司君が理解できるまでにはすごく時間がかかると思うんだ。だからね。まずは受け入れてみようよ。隆司君って人をさ」

彼女はそう言って最高のスマイルでぼくを見つめた。

「私も、受け入れるから。貴方のこと」

それを証明するように、彼女はぎゅっとぼくの手をより強く、でもどこか優しくふんわりと握り締めた。

ぼくはより一層強く、彼女の体温がその手と胸にあてられた掌から伝わるのを感じた。

それだけで、ぼくは何か重しが取れた気がした。

受け入れられるのだろうか。ぼくは。ぼく自身を。

それはわからないし、受け入れられたところでどうなるのかもわからなかった。

でも、ぼくは頷いた。

彼女が受け入れると言ってくれたぼくを、ぼくもまた受け入れたかったのかもしれない。

彼女の唇が、動く。

『だから、そんなに傷つかないで……』

明日がどうなるかわからない。

歪んでいるのがぼくなのか、セカイなのかもわからない。

この世は矛盾だらけで、許せないんだけど。

でも、

ぼくに傷つかないでと言ってくれた少女が生きる世界を、ぼくは受け入れてみたいと思ったんだ。

後日談になる。

音衣に思いつきり泣きついた後、ぼくたちは呆れた顔の宏哉さんに迎えられた。

「何があってそうだったんだ？」

と言われて音衣はあさつての方向を向いて無視した。

しかし、それで宏哉さんは何も訊かずにいてくれた。器の大きい人だと思う。

それからぼくらは図書室でよく過ごした。

勉強もしたし、本も読んだし、偶に図書委員の手伝いもした。前よりも図書室は過ごしやすい空間になっていた。

音衣とは宏哉さん抜きで買い物なんかに行くようになっていた。二人っきりの時、音衣は時々ぼくの様子を窺うようにじっと見つめたのだけど、ぼくは決まって「大丈夫だよ」と言う。

彼女は疑うことなく「うん」と頷き、そのまま買い物続けた。事実ぼくは前のような圧迫感や嫌悪感に苛まれることもなく、おむね一般的に過ごすことができていた。

クラスメイトからは憑き物が落ちたようだと言われたけど、まあほとんどそれに近いし、否定はできない。そういう時は曖昧に笑って過ごした。

そんな風に日常を過ごして、現在、ぼくは図書室の前に立っている。

宏哉さんはもう三年だ。受験を控えている彼に、ぼくは言いたいことがあった。

音衣に内緒でという接頭詞がつく必要があるかもしれない。

だって音衣に言ったらちよっと面白くない展開が待っていそうだったからだ。

ぼくは隙を見て一人図書室で勉強する宏哉さんの前に立った。

「隆司？どうした？」

彼は相も変わらず人を委縮させる鋭い視線を向けてくるが、それが意図的ではないので少し笑えてくる。

「いえ、ちょっと話したいことがあったんです」

「ふーん。まあ座れ」

出会ったあの日のように彼の前に座ったぼくは深呼吸をしてから一気に告げる。

「宏哉さんをこれから兄さんって呼ばしてもらってもいいですか？」
「……はっ？」

あまり見たことのない啞然とした間抜け表情を浮かべた宏哉さんはそのまま固まってしまった。

「えーっという理由はあるんですが……」

「待て、それはあれか。ついに、というか漸くというか、アレする気になったのか？」

「アレがなんなのかがはっきりしませんけど。」

はい。そろそろ音衣に告白しようかと思いました」

「だから義兄さんってか？」

呆れたというか明らかに不機嫌になった宏哉さんは、今度は意図的に睨んでくる。

「人が受験勉強でイライラしているというのに、なんだそれは」

「それに関してはいしません」

本当に申し訳なく思えてぼくは頭を掻いた。

「その、漸くぼくもぼくが、好きに思えてきたんです」

彼は不意に冷たく感じられるほどに目を細めた。

「そうしたら、急に音衣が、その、い、愛おしく思えてきたんです」
その人の兄に言うには恥ずかしすぎる言葉だった。けど、きつと有りのままに話さないと、彼には届かない。

「そうか。……、ま、好きにすればいいだろう」

彼はホントに馬鹿どもはと呟いて、すっきりした笑みを浮かべる。

「こういうのを、なんていうですかね。人を好きになるには自分を好きになる必要があるってことなんですかね」

ぼくは照れくさくて兄さんとは顔を合わせられそうになかった。頬が熱く、心臓が暴れていた。

「違うと思うぞ」

ほとんど無意識の言葉を彼は否定した。

「人を好きになったから、自分も好きになれたんじゃないか？」
……。

今度はぼくが呆気にとられた。

「どうしてそう思うんですか？」

本当になんとなく聞いてしまった。

彼は微笑みながら、

「だって、そっちのほうがなんかいいだろう？」

漠然としすぎた理由だった。だけど、それはなんかいいなってぼくも思えた。

そうしてぼくは音衣に告白するわけなんだけど。その結果はまた別の話。

そういえばもう一つ、兄さんを兄と呼びたくなった理由がある。

それは、彼がぼくの本当の兄のように感じられたからだ。

彼はあの日、悩んでいたぼくにそっと道を示してくれた。

ぼくはそれがあったから、音衣にぼくの本心を伝えられたように思える。

そんなつもりは兄さんにはなかったのだろうけど、それでもぼくはすべて兄さんのおかげだと思う。

直接伝えるのは恥ずかしいから、此処で言う。

ありがとう。兄さん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641u/>

苦厭 - クエン -

2011年6月18日08時55分発行